Q17　天草・島原の乱での祇園橋近辺での戦いの様子は？

天草・島原の乱は、寛永十四（1637）年に起こりました。
ここは、乱について語る場ではないので、乱についての詳しい記述は避け、本戸での戦いについて述べたいと思います。
乱については、多数の書籍が販売されたり、天草キリシタン館などの展示館がありますので、詳しいことを知りたい方は、そちらを参考にしてください。

といっても、正確な史料が残っていないので、詳しいことは分かりません。ただ、細川藩史料によると、次のように記されています。

志柿の番頭は、味方の敗軍を救おうとしたが、崩勢に引きずられて退去した。亀の川の沢木七郎兵衛も、上下五十人で鉄砲を揃えて、一揆を防いだが、多く討たれ、止むなく本戸方面へ引き取った。
敗走する唐津勢は、本戸の町はずれにきて、幅三十間ほどの山口川の土橋を渡った。ところが、一揆が忍びを使ってすでにこの橋の中ほど一間ばかりを切り落としており、人馬もろとも川に落ちて死亡するものもあれば、死にかけたものも多く出た。

『細川藩史料による天草・島原の乱』戸田敏夫・新人物往来社

また、「四郎乱物語」には。

三宅籐兵衛陣中をかけ廻り引くな引くなと下知すれ共、なびき立たる大勢なれば、ふみ留まるものもなく、浜の手は小松原、今釜より中村さして引くもあり、山の手は町村より山口にかけ上がり、かけ道に出ずるもあり、中道は町村のはずれ舟ばしという大橋中ば落ちたるをしらず馬をのりかけ、かえさんとすれば敗軍の勢いさゝえ、為すかたなく水中に乗り落とし、馬をいため、歩立になる武士もあり、衣類兵具をぬらし、

祇園橋のほとりに建てられている、天草の乱激戦之跡の碑

こごえてあがる武士もあり、今は一所につぼむべきようもなく、散々になりにけり。

『四郎乱物語』筆者不明・天草キリシタン館刊より

ただし、細川藩は、この当時は参戦しておらず、また一揆側の史料が全く残っていないことから、正確には分かっていません。

四郎乱物語は、作者も書かれた年代も定かではありませんが、この中にも橋が落とされたとあります。

更に詳しく知りたい方は、この本渡合戦を題材にした歴史小説「町山口の血戦」を読まれることを勧めます。合戦の様子が生き生きと詳しくえがかれています。といっても、手に入らないと思いますので、読まれたい方は図書館まで足を運んでください。（収録・『西海の心・天草歴史文芸作品録』鶴田文史著・西海文化史研究所）

また余談ながら、この本戸合戦は、十一月十四日のことです。新暦に直すと、十二月三十日です。寒中に水中に落ちた兵士は、こごえた事でしょう。

また、当時の暦、太陰暦から月の満ち欠け、潮の満ち引きが分かります。つまり十四日と言えば満月。天草本渡での満潮はだいたい9時ころ、干潮は15時くらいです。これは、現在のことですが、天体の動きは、悠久なものですから、多分当時も同じだったと思います。

乱は、祇園橋架橋より百九十五年前の出来事です。前述の史料が正確ならば、当時から橋は土橋であったが、橋が存在していたことが分かります。

土橋とは、先にも述べたように、木造の橋に、土を被せたものです。

また、祇園橋がかかっている現在の川幅は、29ｍですが、当時は祇園橋の下流にあったこともあり、かつ現在のように、河岸の埋立がされておらず、幅五十間、つまり90ｍほどもあった、かなり広い川幅であったことが分かります。

天草・島原の乱関係書籍（順不同）
『西海の乱と天草四郎』鶴田文史
『天草四郎の陣中旗と首塚』鶴田文史
『島原の乱』神田千里
『天草四郎時貞、真実の預言者』今倉真里
『天の子　天草四郎』加来耕三
『天草時貞』岡田章雄
『島原の乱』助野健太郎
『九州キリシタン風土記』浜名志松
『天草・島原の乱』煎本増夫
『原城発掘』長崎県南有馬町
『天草の歴史』天草市教育委員会
『天草の歴史探訪』鶴田文史
『熊本県の歴史散歩』熊本県高等学校社会・・
『長崎県の歴史散歩』長崎県高等学校社会・・
『細川藩史料による天草。島原の乱』戸田敏夫
『新・天草学』熊本日日新聞社
『天草のこころ』北野則夫
『天草島原の乱とその前後』鶴田倉造
『Ｑ＆Ａ　天草四郎と島原の乱』鶴田倉造
『街道をゆく　天草・・の諸道』司馬遼太郎
『郷土史辞典　熊本県』岩本悦・水野公寿
『富岡城物語』苓北町
『原城発掘』長崎県南有馬町
『天草近代年譜』松田唯雄
『肥後学講座Ⅲ』吉村豊雄
『四郎乱物語』天草キリシタン館　など多数

写真上　新千人塚・殉教公園
（同所にある建設の由来などの説明文は次ページ）

写真中　旧千人塚が発掘された地に建つ碑
（位置はｐ11の地図参照）

写真下　旧千人塚
（上写真の殉教公園の新千人塚の後ろに移築してある）
碑には「自中古有口碑
地蔵大菩薩
時人曰千人塚
安永二巳七月日」と刻まれている。

Q18　祇園橋に関しての文学は

祇園橋に関しての文学作品は、ほとんどないようです。

天草に関する文学をまとめた本として、昭和三十年初期に発行された、『天草の文学１・２』武藤光麿・編著（熊本国語研究会刊）があります。この本には、小説、戯曲、紀行、随筆、現代詩、漢詩、長歌、短歌、俳句、歌謡と天草に関する文学を網羅しています。調べてみましたが、祇園橋は全く登場していません。

ただ惜しい小説があります。それは「南国巡礼」という新村出博士の紀行文です。

彼は、祇園橋近くの喜久屋という旅館に泊まっています。当時の地図を見ると、現在の亜壽多のところです。橋の目の前に泊まって居ながら、祇園橋には全然触れていません。

数多い天草文学に、橋が登場しないのは、祇園橋が当時は世に殆んど知られていなかったためでしょうか。

ただ唯一と言えるのが、橋本徳寿の歌です。橋の袂には、この橋本徳寿の歌碑が建てられています。ただ祇園橋を詠んだ歌でなく、天草の乱本渡決戦を詠んだものであるのが、ちょっと残念です。

橋本徳寿は、碑の案内にもあるようにたびたび天草を訪れ、『天草日記』を著しています。この中には、祇園橋についての記述と短歌が数句掲載されていますので、紹介しましょう。

町山口川の
流れせきとめし
殉教者の
むくろ数百千にして
名をばとどめず

徳壽

橋本徳寿の歌碑
中央新町　町山口川河畔

〈歌碑の説明文〉

橋本徳壽先生は明治二十七年横浜に生れる。工学院卒。木造船技師。現代歌壇の長老で短歌「青垣」を主宰。著書として造船関係、歌集、歌論、実録戦記物など四十数部あり。

天草には造船講習会の講師として大正六年以来十数回来島、天草をこよなく愛し多数の天草詠や「天草日記」の著作あり。

歌碑はこの外に当市内の諏訪神社境内と大矢崎に二基がある。

与謝野晶子の歌
船之尾町　鶴田文史邸

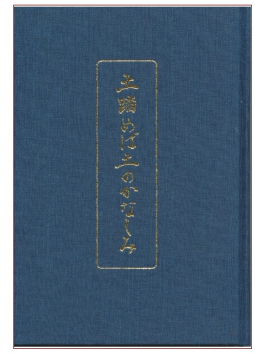
昭和27年9月23日（火）晴　ポスト、祇園橋
　町山口に反りの強い石橋がある。細い石橋で祇園橋といふ、私はこの古い石橋が大好きだ。（この橋の附近があの寛永十四年の切支丹宗徒の反乱、天草の乱の激戦地で、敵味方の屍で川の水の流れが止まったそうだ）その石橋の石の欄干に真赤な大きな蒲団が三枚並べて乾かしてある。目が痛いほどの赤さだ。川水までが赤く染まってゐる。
9月28日（日）晴　強風　本渡の橋、繁華街、千人塚
　寛永千人塚といふのがある。ナカムラ靴店の横、鍛冶屋のさき、狭い道を更に左に折れ、左に折れた所に、石の地蔵が四、五基あり、朽ちかけた屋根があり、朽ちかけた角塔婆が立ってゐる。かの寛永14年の天草の乱で、町山口川の流れをせき止めた、敵味方何百何千の戦死者殉教者の屍を、時人が哀れんでここにうめたのださうだ。

〈短歌〉
入り組める路地奥に『寛永千人塚』石地蔵四、五基角塔婆一本
本渡橋諏訪橋石の祇園橋あといくつある橋の名知らず
祇園橋の石の欄干にほされたる蒲団に川のゆく水赤し
天草五橋らくらく走り来し島にしばしなじめずただ古き祇園石橋

また浜名志松氏は、『土踏めば土のかなしみ』と言う歌集の中で、
祇園橋といふアーチ型の石橋もやや傾きぬ水渇れし川
天草の乱激戦の跡と彫られたる石碑傾き川の辺に建つ
千人塚と伝へし古き墓碑一基彫られし銘も読みがたかりき
と詠んでいます。

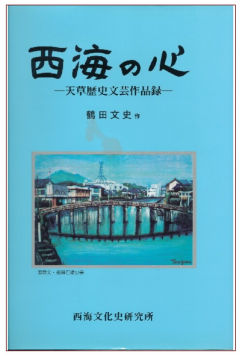
鶴田文史氏も、架橋のいきさつの物語を書いています。（下記参照）

『天草日記』橋本徳寿
本渡諏訪神社社務所発行
昭和49年2月11日



『土踏めば土の悲しみ』
濱名志松

平成８年10月12日



『西海の心』　鶴田文史
西海文化史研究所刊
平成17年12月31日
「天下の大石橋（祇園橋架橋物語）」
「夕映えの祇園橋」収録